

『祖靈祭』第三部から 三つのテクエスト

関口時正訳

- 【1】 詩人自身による序文
- 【2】 コンラットの独白
- 【3】 ピョートル神父の幻視

序文

ポーランドは半世紀前から、一方で、僭主せんしゅどもの倦むことを知らぬ無慈悲な残酷行為のうちつづく舞台となりながら、他方で、民衆の限りなき自己犠牲と、初期キリスト教徒の迫害時代以降は例のないような不屈の抵抗精神とを世に示してきた。王侯らは、地上に新たな光が現れるかも知れぬという予感、自分たちの滅亡も近いという、ヘロデ王と同じ予感をいただき、民衆は民衆で、みずからの再生と復活をいよいよ強く信ずるに至ったようだった。

殉教者ポーランドの歴史は、数え切れぬほどの犠牲者と多くの世代を巻き込み、血なまぐさい光景は、わが国のあらゆる地方で、また異国の地でも、繰り広げられている。——今日ここに発表する物語詩が扱うのは、この巨大な絵巻のごく小さな部分、皇帝アレクサンドルが着手した弾圧の時代に起きた事件のほんの幾つかにすぎない。

一八二二年ごろ、あらゆる種類の自由を否定する、皇帝アレクサンドルの政策が徐々にその中味を明らかにされ、固められ、一定の方向を指すようになっていった。いたるところで全てのポーランド人に対する迫害が始まり、ますます暴力的に、残忍なものになっていったのもこの頃だった。そこで舞台上に登場したのが、わが国の歴史に名を轟かす、評議員セナトルノヴォシリツェフである。ポーランド人に対するロシア政府の本能的、動物的憎悪は、政治上この上なく有効に利用できると喝破した最初の人物であるノヴォシリツェフは、その憎悪を自分の活動の基礎に据え、ポーランド民族籍というものの抹殺を目標に定めた。その結果、プロスナ河からドニエプル河（現ドニプロ河）まで、ガリツィアからバルト海までの地域全体が、閉鎖された巨大な監獄の様相を呈することとなる。全行政が、ポー

ランド人を対象とした一個の巨大な拷問装置として運転され、その車輪を回していたのが皇太子コンスタンチンであり、評議員セナトルノヴォシリツエフだった。

計画的なノヴォシリツエフは、将来をになう世代の希望を萌芽のうちにすべて摘みとることをめざし、まず子供や若者から拷問にかけることとし、刑吏たちの本部を、リトアニアからウクライナにまたがる地域の学問の中心地、ヴィルノ〔現ヴィリニユス〕の町に置いた。当時、ヴィルノ大学には、ウィーン会議と皇帝の勅許に基づいてポーランド人に認められていたポーランド語とポーランド民族籍の維持を目的としたさまざまな学生文学サークルが存在した。そうした団体は、政府の猜疑心が高まりつつあるのを見て、新たな勅令によって活動が禁止されぬうちにみずから解散した。しかしノヴォシリツエフは、諸団体が解散した一年後にヴィルノ入りしたにも拘らず、皇帝インペラトルの御前で、これらの団体がまだ活動しているいっわと詐った。そして学生たちの文学活動は明らかに反政府運動だと主張して数百名の若者を収監、みずからの影響力を行使して、彼らを裁くための軍事法廷を設けさせた。秘密裡に運ばれるロシア式裁判手続きでは、被告は弁明のしようもない。なぜならば、いったいどういう罪状で自分が召喚されたのかも分らないことが少なくないからである――たとえ供述したとしても、どういうわけか、その一部は採用されて調書に記されるが、別の部分は採用されない。皇太子コンスタンチンから遣わされ、無制限の権力を有するノヴォシリツエフは、告発者であり、裁判官であり、刑吏だった。

彼はリトアニアの学校をいくつか廃校とするとともに、これらの学校に通う若者を公民としては死者とみなし、いかなる領主屋敷における用務に就くことも認めず、いかなる役所においても雇用してはならず、公私を問わずいかなる施設においても学業を継続、修了してはならないという通達を出した。学ぶことを禁止する、このような命令は歴史上に例を見ないものであり、ロシア独自の発明にはかならない。学校が閉鎖されただけでなく、数十名の学生が、あるいは坑夫としてシベリアの鉱山に、あるいはアジア地域の兵営に送られた。その中には、リトアニアの名家に生まれた未成年の者もいた。二十数名が――教師もいれば学生もいた――ポーランド民族籍の嫌疑をかけられて、ロシア奥地へ永久追放された。そうした若者のうち、これまでロシアから脱出するのに成功したのは、わずかに一人にすぎない。

リトアニアに対する当時の弾圧について書いた者は誰も、ヴィルノの学生たちの一件には何かしら神秘的で謎めいたものがあるという点で一致している（原注）。青年たちの棟梁だったトマシユ・ザンの神秘的で柔和ながらも揺るぎない

性格、若い囚人たちに共通した宗教的諦念、同志愛と結束、その後明らかに迫害者どもに下されたと思われる神の罰——そうしたことは、一連の事件に参加した者やこれを目撃した者の精神に深い感銘を残した。それらの事件の記述は、読者を遠い昔の世に、信仰と奇蹟の時代に連れてゆくことだろう。

当時起こった一連の事件をよく知る者は、本書の筆者が歴史的背景や登場人物たちの性格を——いささかも付け足すこともなく誇張することもなく——誠意をもって描いたと証言してくれるに違いない。そもそも何のために付け足したり誇張したりする必要がある。敵に対する憎しみを同胞たちの心に燃えさせたため？ 憐みの心をヨーロッパにおいて呼び起こすため？ ——現在ポーランド民族を苦しめる、そして現在ヨーロッパが平然と眺めるものに比べれば、当時のあらゆる残虐行為など、いったい何だろう！ 筆者の願いはただひとつ、リトニアのこの十数年間の歴史から、民族にとって大切な記憶を残しておきたいということだけだった。大昔からよく知る敵に対してあらためて同胞の憎悪を掻き立てる必要はなかった。キリストを悼んで泣いた、思うように動けぬエルサレムの女性たちのように、わが民族はただ、救世主^{メシア}の言葉をもって訴えるだけだ——「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のために泣くがよい」と。

(原注) レオナルト・ホチコの著作『古代から現代までのポーランド物語』、蜂起のさなかにワルシヤワで印刷された小冊子『ヴイリニユスのノヴォシーリツェフ』、また各種人名事典やユゼフ・ストラシエーヴィチ著『ポーランド人とポーランド人女性たち』に載るトマシユ・ザンの伝記を参照せよ。

第一幕 第二場

独白

コンラット(長い沈黙ののちに)

孤独!——社会に何ができる? 社会にとって詩人とは何だ?

俺の歌から、全思想を聴きとる人間がどこにいる?

その思想の精神が放つ光を全て見てとることのできる人間が?

社会のために声と舌を酷使する者は不幸——

舌は声を裏切り、声は思想を裏切るからだ。

思想は言葉の中で壊れる前に、すばやく魂から飛び出すが、

言葉は思想を吸いとり、思想のほとりおので慄く。

呑み込んだ不可視の河を擁して大地が慄くように。

大地の慄きから、果して社会は流れの底をつきとめ得るか、

奔流の行く先を察し得るか?——

血液が目に見えぬ深い隘路を流れるように、

感情は魂の中を巡り、燃え上り、熾おきとなる。

人が俺の歌に読み取れる俺の感情は、

せいぜい人が俺の顔に見て取る血ほど。

わが歌よ、おまえは世界の果ての彼方にある星だ!

使者としておまえに向かつて放たれた地上の視力は、

たとえ硝子の翼を借りても、おまえには届かない。

せいぜいおまえの銀河にぶちあたって終わりだ。

それらはみな太陽だろうと推理はするものの、

それらを数えることも、測ることもできぬ。

わが歌よ、おまえたちに人間の眼も耳も要らぬ!——

俺の魂のはらわたで流れていればいい、

俺の魂の高みで輝けばそれでいい、

地下水脈の如く、天上の星の如く。

汝——神よ、汝——造化よ、耳を藉かしたまえ!

これは汝らにふさわしき音楽、ふさわしき歌。――

われは名手！

名手の俺が手を伸べる！

天の上まで伸ばしたわが掌てのひらを

星々の上に置く。アルモニカの硝子碗びんに置くように。

時に激しく、時に緩やか、

俺はおのれの精神で星を回す。

百万の響きが流れる。百万の響き、そのどれもが

俺が引き出した響き。俺は全ての響きを知っている。

俺はそれらを一致させ、分離し、連結し、

それらを虹に、和音に、スタンザに編む。

雷鳴の中へ、稲妻のリボンの中へ注ぎ分ける。――

俺が双手を引き、世界の縁より高く挙げると

アルモニカの碗も動きを止めた。

独りで歌う……俺の歌声が聞こえる――

大風の兆しのような、長々とひきのばされたその歌声は、

人類の全ての響きを貫いて吹きわたり、

恨めしく呻吟し、荒々しく咆哮し、

無音の歳月が唱和する。

音はどれも、奏でられると同時に燃えあがる。

それは俺の耳の中、俺の眼の中にある。

波を揺する風のように

空を切る音に俺はその飛翔を聴き、

雲の衣裳を纏ったそれを俺は見る。

神に、造化にふさわしい、その旋律！

それは大いなる歌、創造する歌、

その歌は力、その歌は覇気、

その歌は不滅！

俺は不滅を感覚する、不滅を創造する、

あなたは一体それ以上の何を為し得たか――神よ？

見よ、これらの思想を俺は独りで自らの内から取り出す。

思想に言葉を受肉させると、飛んでゆき、
天空のいたるところに散り広がり、
転がり、鳴り、輝く。

もう遠い。それでも俺は感じる、

彼らの美しさを俺は愛でる、

彼らの円やかさを掌まつに感じる、

彼らの動きを俺の思考は言いあてる――

わが詩の子たち、俺はおまえたちを愛する！

俺の思想！ 俺の星々！

俺の感情！ 俺の大風！

おまえたちに取り囲まれ、一家の父のように俺は立つ、

おまえたちは皆わが子！

広い世の中でもてはやされてきた、

あらゆる詩人、あらゆる賢者、預言者らよ、

俺はあなた方を踏みつける！

たとえ彼らが今に至るまで自分の魂の子らに囲まれて歩み、

たとえあらゆる称賛とあらゆる喝采をみずから

耳にし、感じ、尤も至極と受け取ってきたとしても、

日々の名声のあらゆる耀きを自らの

花冠にして灯すことができたとしても、

幾世紀、幾世代にも互って蓄積された

あらゆる称賛の音楽、桂冠の装飾をもってしても、

彼らは、自身の幸福、自身の力をこれほどには感じまい、

今日、この孤独な夜の中、俺が感じるほどには、

おのれの裡にあつて独り歌う、

おのれのために歌う、この俺ほどには。

そうなのだ！ 俺は感じやすい、俺は強く、明晰だ！――

かつて、この瞬間ほどに感じたことはなかった。

今日、俺は絶頂にある、今日、俺の力は南中する、

今日、俺が至高の者か、単なる傲岸不遜の輩か、明らかになる。

今日が運命の時であり、

今日、俺は己の魂の両腕に最も強く力をこめる――

囚われ、盲目の身となり、柱の下で沈思する、
今こそ、サムソンの刻限。

俺は肉体を脱ぎ捨て、霊の羽のみ身に着ける――

俺には飛翔が必要だ！

俺は恒星と惑星の円環から飛び出て、

創造主と造化の隣り合う境に到達する。

そして手に入れた、遂に俺は手に入れた――この二枚の翼を。

これで充分だ。東から西へ、俺はこの両の翼をひろげ、

左翼で過去を、右翼で未来を撃ち、

感情の光線を追って、俺は到達する――あなたに！

そしてあなた^{あなた}の感情を覗き込む。

感じつつ天にまします、と言われるあなた^{あなた}！

俺はここだ、俺はやって来た、どうだ俺の力は！

俺の翼はここまで達するのだ！

だが俺は人間だ、そして俺の肉体は地上にある。

地上で俺は愛した。俺の心は祖国に残った。――

だがその俺の愛は、

薔薇の花にとまる虫のように

一人の人間に注いだものではなかった。

一つの家族に、一つの世代にとどまるものでもなかった――

俺は民族のすべてを愛した！ 民族の過去の世代を、

未来の世代をすべて、この腕の中に掻き抱き、

友として、恋人として、夫として、父として

この胸に抱き締めた。

俺は民族を立ち上がらせ、幸せにしたい、

この民族によって、全世界を驚かしたい、

ただその術^{すべ}がないので、それを求めてここまで来たのだ、

思考のもつあらゆる力を装備して来た、

思考の力によって、天からあなた^{あなた}の雷を奪^{いかすち}い、

あなた^{あなた}の惑星たちの歩みを追跡し、海の底を開いてみせた。

そればかりか、人が人に賦与できぬこの力が俺にはある。

いつもはまるで火山のように、自らの裡にひそみ、時として

言葉を通じて噴煙を上げる、感情というものを俺は有する。

この力もまた、俺はエデンの樹から得たわけではない。

善悪の知識を与える果実からでも、

書物や物語からでも、

問題を解くことによっても、

魔術の研究によってもない。

俺は生まれついで創造者なのだ！

俺の力は、あなたの力の源泉と

同じ源泉から来た。あなたもまたみずから

力を求め、探しまわったわけではなかった。

あなたはその力を失う恐れを知らぬ——俺もまた失うことはない。

俺の力が漲る時、空高く、雲の跡を見やれば、

不可視に近い翼で航行する渡り鳥の声も聞こえる、

この鋭く強い視力は、あなたが俺に与えたのか、

それともあなたと同じで、俺自身が獲得したものなのか？

俺が欲すれば、この眼で鳥たちを、罨に陥れるかのように、

停止させられる——群れは恨めしい歌を響かせる。

だが俺が解放せぬ限り、あなたの風も彼らを追いたてることはできぬ。

俺がありたけの魂の力で彗星を見れば、

俺が見つめている限り、星もその場を動けぬ。

不完全で、取るに足らぬ、

それでも不滅の人間たちだけが

俺に仕えず、俺を知らず——俺をもあなたをも、

われらのいずれをも知らぬ！

俺は彼らに対処する策を探す。

ここ、天上で。

俺が自然を御すことのできるこの力を、

人間たちの魂に対して働かせたい。

領くだけで鳥や星を操るが如くに、

同胞たちを治めねばならない

武器によらず——武器は武器を呼ぶゆえ。

歌によらず——歌の成熟は遅いゆえ。

学問によらず——学問の衰弱は速いゆえ。

奇蹟によらず——それはあまりに騒がしいゆえ。

俺は俺の裡にある感情で統治したい！

あなたと同じく、常に全てをそして密かに統べるのだ——

俺が何をしたいか、それはやがて人々も悟るだろう。

俺の望み通りにそれを実現する者は、幸せになる。

もし逆らうのであれば、その者は

苦しみ、滅びるがいい！

俺が望めば、思想と言葉から歌が構築される。

俺にとつての社会も、そうした思想と言葉と同じであつて欲しい——

それは正にあなた、あなたの治め方だというではないか！

俺が思想を毀さず、言葉を殺さなかつたことはご存じだろう。

あなた、あなた、あなたの魂を統べる力と同じ力をもし俺に賦与してくれば、

俺は俺の民族を、歌のように創造するだろう。

そしてあなた、あなた以上に大きな不思議を成し遂げるだろう——

幸せな歌を、俺は口ずさむだろう！

人々の魂を統べる力をわれに与えよ！——民衆が世界と呼んで

称えること久しい、この命なき構築物を俺は心底蔑んできたから、

それを俺の言葉が容易に破壊できるかどうか、これまで俺は

試そうともしてこなかつた。

だが俺は感じている。もしもおのれの意志に圧力をかけ、

集中させ、発光させれば、あるいは百の星を消し、

別の百の星を灯すことができるかもしれない！ と。

なぜなら俺は不滅だからだ！——被造物界には他にも

不滅の人間がいるが、自分以上の人間に出逢つたことはない。

天上の至高者よ！——俺はあなたを求めてここまで来た、

下界の低き地上にあつて感じつづける者のうちの至高者である、この俺が。

まだ俺は出逢えていないが、あなたがいるということは見当がつく。

俺はあなたに逢いたい、そしてあなたの優位を感じたい——

俺は権力が欲しい。権力を与えよ。でなければ権力に達する道を示せ。

かつて預言者ら、魂の統治者らがいいたとは聞いた。

そして俺は信ずる、彼らにできたことは俺にもできる、と。
あ、あ、あなたの所有する権力が俺は欲しい、
あ、あなたが統治する如く、俺も人々の魂を統治したい。

(長い沈黙)

(皮肉をこめて)

黙っているな、黙っているな！ 判った。俺はあ、あなたを見通した。
あ、あなたが何であるか、あ、あなたがどのように統治するか、理解した。――
あ、あなたを愛と呼んだ者は嘘をついた。
あ、あなたは単に智慧でしかない！
人々は心ではなく思考によってあ、あなたの道を知ろうとする、
心ではなく思考によってあ、あなたの武器庫をつきとめようとする。――

書物、金属、数値、屍骸

といったものを研究し、

究めた者は、あ、あなたの強大な力の

ほんの一部をものにしたに過ぎない。

彼らが発見するのは毒薬、火薬、蒸気であり、

彼らが発見するのは光線、煙塵、騒音であり、

彼らが発見するのは法則性であり、

似非賢者、無学者に対する悪しき信仰でしかない。

あ、あなたは、世界の利用を思考にゆだね、

心は永遠の罪滅ぼしをつづけるよう放置した。

あ、あなたは俺に最短の人生と

最強の感情とを与えた。

(沈黙)

俺の感情とは何か？

ああ、火花に過ぎぬ！

俺の人生とは何か？

ああ、一瞬に過ぎぬ！

明日轟きわたる雷は、今日、何なのか？

火花に過ぎぬ。

歴史を読んで知る、連綿と続く世紀の全体は何か？

一瞬に過ぎぬ。

一個の人間全体、つまり小宇宙は、何から生じる？

火花から。

俺の思想の豊饒を蹴散らす、死とは何か？

単なる一瞬。

世界を自らの懐ろから切り離す前、いったい彼は何だったのか？

単なる火花。

彼がふたたび世界を呑み込む時、世界の永遠は何となる？

単なる一瞬。

〔左側の声〔右側の声と同時に〕〕

馬に跨るように

魂に跨らねば。

走れ！ 走れ！

全速で、全速で！

〔右側の声〔左側の声と同時に〕〕

何たる狂気！

奴を守るぞ、守ろう、

翼で覆ってやろう、

頭部を。

コンラット

瞬間も火花も、それが延び、燃える時――

創造し、破壊する。

大胆に、大胆に！ この瞬間を延ばし、伸ばせ、

大胆に、大胆に！ この火花を掻き立て、燃やせ！――

そうだ――いい――それでいい。俺は再びあなたに挑戦する。

親しみをこめて俺はあなたの前に魂をさらけ出す。

黙ったままか？――あなたはみずからサタンと闘ったではないか？

正式に俺はあなたに挑戦する！

俺を侮るな――俺はここまで独りで昇って来たが、一人じゃない。

地上で俺は偉大なる民と心で結ばれている、

俺には天軍が、能天使も座天使もついている。

瀆神者となろうとも、

俺はあなたに対し、サタンにもまして血みどろの闘いを挑もう——
サタンは智力で闘ったが、俺は心をもって挑もう！

俺は苦しんだ、愛した——苦難と愛の中で俺は育った。

あなたが俺から個人的な幸福を奪った時、

俺はみずからの胸で両の拳を血に染めたが、

拳を天に向けて挙げはしなかった。

〔左側の声〔右側の声と同時に〕〕

俺は駿馬を

鳥に変える。

鷲の羽もて！

上へ！

飛べ！

右側の声〔左側の声と同時に〕

流星よ！

何という狂気がおまえを

深淵につき落とそうとしていることか！。

コンラット

今や俺は魂によっておのれの祖国に受肉された。

俺は肉体によって祖国の魂を呑み込んだ——

俺と祖国はひとつだ。

俺の名はミリオン——なぜなら数百万の人間に代わって

愛し、拷問に耐えているからだ。

車輪に磔となった父を見る息子のように、

俺はあわれな祖国を見る。

胎内にみずからの胎児の痛みを感じる母のように、

民族全体の苦しみを、俺は感じる。

俺は苦しみ、狂う。——だがあなたは賢く朗らかに

常に統治し、

常に裁く、

そして人は言う——あなたは決して過たぬ、と！

耳かたむけよ！ もしも、俺がこの世に生まれてくる時、
《あ、な、たは愛である》と耳にして、息子らしく
信じたことが本当なら。——もしもあ、な、たが世界を愛しつつ生んだのな
ら。

もしも生まれたものに対してあ、な、たに父としての愛があるのなら。

あ、な、たが方舟に封じて洪水から救った動物たちにも

もしも優しい心があったとするならば。

もしもその心が、偶然によって生まれるのみで、決して

完全に成熟し、成長し得ぬ怪物ではないとしたら。——

もしもあ、な、たの統治下、優しさは単なる無秩序ではないのなら、

《助けて！》と叫ぶ、百万の人間を、もしもあ、な、たが

複雑な計算の方程式を見つめるように見ているだけではないとしたら。

もしもあ、な、たの世界で、愛が何らかのために必要なものであり、

単なるあ、な、たの計算違いではないのだとしたら……

「左側の声〔右側の声と同時〕

鷲をヒドラに変えよ！

奴の眼を抉ってやる。

進め、突撃だ！

煙！ 炎！

雄叫び、雷鳴！

「右側の声〔左側の声と同時〕

明るい太陽から来たった

彷徨の流星よ！

おまえの飛翔が終わるのはどこだ？

終わりなし、終わりなし！

コンラット

黙ったままか！——俺はあ、な、たに己の心を底までさらけ出した、

後生だから、俺に権力をくれ——驕り昂ぶる者が

地上で手にした権力の一部、ほんの僅かな一部でいい、

その切れ端があれば、俺がどれだけの幸福を創造できることか！
黙ったままか！——心に免じてでなければ、理性に対して与えよ。——
御覧の通り、人間と天使を合わせた群れの先頭に俺は立っている、
俺は、大天使たちよりもあなたのことをよく知っている、
権力を俺と半分ずつ分け合う価値があるというものだ——
俺の見当違いなら、応答せよ——黙ったままか！俺は嘘をつかぬ。
あなたは黙ったままで、自分には強い腕があると思っている——
思考が壊せぬものも感情には焼き切れることを知るがいい——
この俺の篝火が見えるか——感情だ！
俺はこれを掻き集め、より強く輝くよう締め付け、
わが意志の鉄の桎梏に装填する、
大砲に砲弾を詰める如く。

左側の声〔右側の声と同時に〕

撃て！ 着火！

右側の声〔左側の声と同時に〕

慈悲を！ 情けを！

コンラット

応えよ——さもなければ俺はあなたの造化を攻撃する！
たとえそれを廃墟と化すことができぬとしても、
あなたの王国の全土を揺さぶってみせる。
俺は、全被造物世界めがけ、声を打ち上げる、
世代から世代へと語り継がれるだろう、この声を——
俺は叫ぶ、あなたは世界の父ではなく……

悪魔の声

ツアーリなのだ！

（コンラット、立ち上がるが、しばらくするとよろめき、倒れる）

左側の悪霊 第一

踏みつけ、捕まえろ！

左側の悪霊 第二

まだ喘いでいる。

左側の悪霊 第一

気を失った。正気に

返る前に、息の根とめるぞ。

右側の悪霊

失せろ！——彼のため、人々が祈る。

左側の悪霊

見ろ、おれたちを追い払おうとしている。

左側の悪霊 第一

この大馬鹿者が！

奴に最後の言葉を吐かせて、もう一段階上の

傲慢に格上げされる手助けをなぜしなかった！

その傲慢の一瞬で——あの頭蓋骨はとくに髑髏むせうになっていた筈。

あの頭にこれほど近くにいて！ 踏みつけられぬとは！

奴の口の中に血を見ていながら、そいつを啜すすってやれぬとは！

中途半端なところで奴を手放したお前は、最低最悪の悪霊だ。

左側の悪霊 第二

また捕まるさ、きつと——

左側の悪霊 第一

ここから失せろ、おれは

おまえをこの角つのにひっかけ、一千年も運んでやろう、

そしてサタン様のお口に放り込んでやる。

左側の悪霊 第二

ハッハッハ！ 脅かそうってか、おばちゃん！ ママ！

おれは餓鬼、おれは泣くぜ——（泣く）——これでも喰くらえ——

（角で打つ）

どうだ、命中したな？

行け、地獄からは出るな！——おお、底まで貫通した！——

たいしたもんだおれの角も——

左側の悪霊 第一

なんてこった！

左側の悪霊 第二（打つ）

どうだ。

左側の悪霊 第一

脚を狙え。

(ノックの音、ドアの鍵を回す音)

左側の悪霊 第二

おっと、坊主だ、隠れるぞ、角も引っ込めろ。

第五場

ピョートル神父の独房

ピョートル神父（床の上で体を十字の形にしてうつ伏し、祈っている）

主よ！ あなたの御前みまえの私はいったい何でしょう？——

塵であり、無です！

しかし、みずからの無をあなたに打ち明けた今——

私は、塵として、あなたと語らおう。

幻視

暴君の出現——へロデだ！——主よ、うら若いポーランドが

着の身着のまま、

へロデの手に引き渡されました。

私には見える——幾筋もの受難の道が長々と、白々とつづく有様が、

幾筋もの果てしなく長い道が、原生林を抜け、雪を踏みしめ、

すべてが北へ北へと！ 彼方へ、遠い国の彼方へ

河のように流れてゆく。

或るものはまっすぐ鉄の門へと吸い込まれ、

或るものは巖の下へ、洞穴の中へ小川のように流れ入る。

また或る道の終わりは海の中——見よ！ どの道の上にも

まるで風に追いつてられる雲のように、馬車の群れが、

すべてが彼方へ、同じ方角へ向かう。

ああ主よ！ 北の彼方へ向かう、

あれはすべて吾らの子たち——主よ、主よ！

それが彼らの運命ですか？——流刑が！

そしてあなたは、彼らをみな若い身空で無駄死にさせ、

吾らの世代が根絶やしになることをみすみす見逃すのですか？

だが見よ——おお！ あの子は逃れた——そして成長しつつある——

あれは庇護者！ 民族を蘇えらせる者！——

異人を母にもち、往古の英雄たちの血を引く、

やがて四十四と名乗ることとなる者。

主よ！ 彼の到来を早めては下さるまいか？

わが民を勇気づけるために？

否！ 民は耐え抜くだろう——見えるぞ、悪党どもが——
暴君たち、人殺しどもによって拉致され、縛められた

わが民族を、全ヨーロッパが引きずり回し、嘲り笑う——

「法廷へ！」と——烏合の衆が無実の者をそこへ引き入れる。

法定には、心もなければ手もない悪党面が並ぶ。裁判官たちだ——

彼らがポーランド民族を裁く！

群衆が叫ぶ——「ガリア人に、ガリア人に裁かせよ」と。

ガリア人はポーランド人に何の罪も見出せず、手をこまぬく。

だが王侯たちは叫ぶ——「有罪にし、磔刑に処すがいい！

奴の血はわれらの上にもわれらの息子たちの上にも降るだろう。

マリアの息子を磔にし、バラバを赦免せよ！

磔にせよ——奴は皇帝の王冠を冒瀆した。

磔にせよ——おまえは皇帝の敵だとわれらは言おう！」

ガリア人が刑吏に引き渡すと、ポーランド人は、嘲笑の茨の冠ですでに
血に染まった、無辜の額を全世界の前上げた。諸国の民が集まった。

ガリア人が叫ぶ——「見よ、何人にも従属せぬ、この自由な民族を！」

と。

ああ主よ！ もう十字架が見える——ああ、いつまであれを

荷い続けねばならないのですか——主よ、どうかしもべに憐れみを！

彼に力をお与えください、さもないと途中で倒れ、死ぬでしょう！

彼が荷う十字架の腕木は、三つの堅い木材で作られたかのように、

三つの枯れた民から成り、全欧州を跨ぐほどに長い。

早くも刑吏に連行され、贖罪の玉座に着いたわが民族は

「われ渴く」と言った——オーストリア人は酢、プロイセン人は

胆汁を飲ませ、涙に暮れる母、自由は足元に立ちつくす。

見よ——一人のモスクワ兵が槍を持って飛び出し、

私の民族を刺し、無実の血が流れ出た。

何たることをお前はした、悪の手先の最も愚かで最も残忍な者よ！

やがてあの者だけが更生し、神に赦されるだろう。

わが愛する人はすでに瀕死の首を垂れて、言った——
「主よ、主よ、なぜわたしを見棄てられたのか！」と。
そして息絶えた！

(天使たちのコーラスが聞こえる——遠くからさらに復活祭の歌も聞こえる——
最後に「ハレルヤ！ ハレルヤ！」の歌声も聞こえる)

天へ、天めがけて、彼は天に昇ってゆく！

すると彼の足許から舞い上がった

一枚の雪のように真白な衣——

衣は舞い降り、広がり——全世界がそれで蔽われた。

わが愛する人は天にいなながら、視界からは消えず、

その三つの瞳は、さながら三つの太陽の如く耀き、

穴の開いた右の掌を、諸国の民に示している。

あの御方は誰？——低く悲しい地上に遣わされた御使いだ。

俺はあの方を知っていたぞ——子供だった——俺には判る、

魂も肉体も、何と大きくなったことか！

盲目だが、童子の天使に導かれてゆく、

三つの顔、三つの額を持つ

——恐るべき御方。

頭上には、天蓋のように開かれた、神秘の

書物があつて、お顔を隠す。

抛って立つ足許には三つの都。

その発する声に、世界の三方の涯が震え上がる。

天からの雷鳴のようなその声が私には聞こえる。

地上においても目に見える、自由の御使い！

彼は名声プロリアの基礎の上に自らの堂々たる

教会を建設するだろう！

諸国の民をも王侯貴族をも超越し。

三つの王冠を踏みしめて立ち、自らは冠を頂かず。

その生涯は——艱難辛苦の極み、

その称号は——諸国民の中の民。

異人を母にもち、往古の英雄たちの血を引く、

その御方の名は四十四。

グロリア！ グロリア！ グロリア！

(神父、眠りに落ちる)

天使たち (降りてくるのが見える)

寝入った——肉体から魂を取り出してやろう。眠気に襲われた

、幼子を黄金の揺り籠から抱き上げるように、感覚のドレスを

そっと脱がすように。朝焼けのような光をまとわせ、

ともに飛び立とう。この耀く魂を第三の天まで運び、

吾らの父の御膝の上に幼子を届けよう——

眠る子よ、父の愛撫によって祝福されるがいい。

朝の祈禱が始まる前には、魂を命ある体に戻してやろう、

そして再び、清らかな感覚のおくるみを着せ、

そして再び、金の揺り籠のような体に戻すのだ。